

滝と花と淡い光の共演

初夏になると村嶋不動滝の周辺で、ハンカイソウの花が咲き、ゲンジボタルが姿を現す。不動尊の祠とともに地域の人が見守る滝は、小さいながらも、一年中水を枯らすことがない。ゲンジボタルの幼虫放流や道の整備に取り組み上村吉明さんと滝までの遊歩道を歩いた。

初夏に見頃を迎えるハンカイソウとホタル

村嶋不動滝への遊歩道には、モミジがおよそ百五十本。春先に新葉が芽吹き、風になびかれさわさわと心地よい音をたてる。向井に住む上村吉明さんは関係団体に協力を依頼し、モミジの植樹を続けている。川沿いを歩けば、ハンカイソウが大きな葉で水際を陣取る。深く切れ込んだ手のひらのような葉が特徴的で、入梅の時期には鮮やかな黄色い花を付ける。上村さんが手づくりした橋で川を渡ると、

空気が一变。肌に涼しい風を感じた。さらに奥へ歩を進めれば、優美な滝が現れる。落差十五メートルほどのこじんまりした滝だが、滝壺に真つすぐ流れ落ちる姿が美しい。川辺へと降りれば、マイナスイオンを含んだ空気に包まれる。

滝の左横に立つ祠には、不動尊が祭られ、コハナが添えられている。滝壺から見つかったまん丸の石には「願い」の文字が刻まれ、不動尊二体とともに並べられている。滝をはさんで祠の向こう側では、飛沫を受けて身代わり不動尊が見守る。熊野古道センターがで、遊歩道

不動滝の森はひっそりと春を待つ、凜とした気配が漂う。

六月から八月にかけて黄色い花をつけるハンカイソウはキク科の多年草だ。木陰や谷筋に生息し、高さは一メートルほど。大きく直立する花の姿を中国・漢の時代の武将「樊噲（ハンカイ）」に例えて名付いたともいわれている。約千本のハンカイソウの花にチョウが舞い、のどかな風景。ちょうど花が咲きはじめるころ、ホタルが最盛期を迎える。

せせらぎが美しいホタルの育つ里

初夏の幻想的な宵を願って、「ホタルの里ムラシマ」がゲンジボタルの幼虫を放流している。中心となつて活動に取り組むのが上村さんだ。ホタルの里ムラシマは、ホ



遊歩道の周りは、ありのままに残されている



谷の斜面から地下水が湧き出るため水は枯れない

ふわりと放つ淡い光が幻想的。ゲンジボタルの飛び方は曲線的

タルの生育環境を保存しようと向井老人クラブ「芳向会」の有志で活動をはじめた団体。村嶋不動滝での幼虫放流は今年で五回目となり、向井小学校の児童と一緒にしている。上村さんは六月になるとガイド役を務め、午後七時から九時ごろまで散策道の入り口に立ち、訪れる人に小型懐中電灯を渡し、ホタルの集まる場所まで案内している。放流だけでなく、ホタルの餌であるカワニナも上村さんの自宅の水槽で育て、カワニナを放流した後も、餌をあげている。

「各地のホタルを育てる会の講習に行き、勉強しました。緑豊かなせせらぎがホタルの生息環境。川が汚れると減ってしまう」と上村さん。道の整備や清掃も率先して行う。

行者の道普請を地元で引き継ぐ

上村さんが村嶋不動滝に通い出したのは昭和四十年ごろ。向井出身の老婆から不動尊のことを聞いたのがきっかけとなり、滝周辺の整備からはじめた。当時は不法投棄された廃車も置かれていたという。知人に重機を借りて道を均し、大工から分けてもらった丸太で橋をつくり、地元の人々の協力を得て整備してきた。不動尊の祠は多く

の寄付を得て平成十九年に完成。朴の額も掲げられ立派になった。ほんの一昔前はこの滝を知る人はわずかで、三十年ほど前、毎年決まった時期になると、滝修行にやってくる関西の行者が一人いた。一カ月から二カ月の間テントを張って住み込み、修行の間には石垣を築き、道普請をしていたという。約十年間続いたが道がきれいになったころ、行者は現れなくなった。最初は遠巻きに見ていた地



「滝に来るようになってから、いろいろな出会いがある」と上村吉明さん

元の人たちも、行者と次第にうち解けた。道普請がきっかけになり、滝を守ろうという機運が高まったという。道の掃除に草刈り、年に一度の滝壺の大そうじをしているうちに、崩れかけた堂の再建話も持ち上がったのだ。村嶋不動滝は人々の思いが積もった、尾鷲の新しい名所。ホタルの小さな光が乱舞する季節に訪れたい。

info

村嶋不動滝
ところ／尾鷲市向井
三重県立熊野古道センター東隣



上) 向井小学校の3～5年生が100匹のホタルを放流 中段右) 額の手は書道家である大畑仁巳さんによるもの 中段中) 重い石を運び、道が崩れるのを防ぐ 中段左) 丸太の端材を組み合わせた手づくりの橋